

『建礼門院右京大夫集』編纂とその背景

小島 明子

はじめに

『建礼門院右京大夫集』（以下『右京大夫集』あるいは本集と呼ぶ）は、平清盛の女で、高倉天皇の中宮となった徳子（建礼門院）に仕えた右京大夫の私家集である。世尊寺伊行を父にもち、楽人・大神基政の女を母とする右京大夫の生没年は明らかではないが、仁平二年（一一五二）～保元二年（一一五七）の間くらいに生まれ、天福元年（一一三三）ごろまでは生存していたらしい。すなわち平安時代末から鎌倉時代初期の動乱の時代に八十年前後の人生を送ったことになる。

『右京大夫集』所収歌は、自詠・他詠を合わせて三百六十首ほどである。長大な詞書を伴う歌もあり、歌集的要素のみならず、日記的要素も備えている。その構成としては、以下の四部とするのが通説である。^(注1)^(注2)

上巻前半部…初めから題詠歌群の終わりまで

上巻後半部…上巻の終わり（高倉院崩御）まで

下巻前半部…下巻の初めから七夕歌群の終わりまで

下巻後半部…それ以下の再出仕歌群

ただし本集の成立については多数の論が展開され、未だ定説を

見ない状況である。『右京大夫集』の研究において基盤となるこの成立の問題について、小稿も新たな視点から検討を加え、合わせて編纂の背景を考えてみたい。

一 先行研究の整理

成立に関する従前の研究を明快に整理して考察をなしたものとして、佐藤恒雄氏^(注3)、野沢拓夫氏^(注4)、谷知子氏^(注5)の論があり、それぞれわかりやすく整理・検討をしている。本稿ではそれらを参考にしつつ、以下のように捉えておくことにする。

□ 一括成立説

富倉徳次郎氏^(注6)、佐佐木信綱氏^(注7)、山田昭全氏^(注8)、奥村寿美子氏^(注9)、大林潤氏^(注10)など

□ 二期成立説

①七夕歌群までとそれ以後で成立期が異なるとみる説
本位田重美氏^(注12)、遠田晤良氏^(注13)、渡辺静子氏^(注14)、野沢拓夫氏^(注15)など

②上巻と下巻で成立期が異なるとみる説

信太周氏^(注16)、玉井幸助氏^(注17)、八寫正治氏^(注18)、草部了円氏^(注19)など

㊦上巻と下巻の間の他、上巻の題詠歌群まで、下巻の七夕歌群までの三箇所^(注20)に執筆時期の断層をみる説

伊狩正司氏^(注21)

四下巻先行成立説

久徳高氏^(注22)、萩原真佐子氏^(注23)、谷知子氏^(注24)

㊦最終段階において一貫した構想のもと改訂されたとする説
佐藤恒雄氏^(注25)

こうした諸説の根拠となるのは、基本的に本集所収歌の詞書である。例えば七二番歌の詞書「大炊の御門の斎院、いまだ本院におはしましし比……」の傍線部から、当該歌は式子内親王が斎院に卜定された平治元年（一一五九）から退下した嘉応元年（一一六九）の間にその女房によって詠まれたものであることが夙に指摘される。また式子内親王が「大炊の御門の斎院」と呼ばれたのは大炊殿に実際に移徙した建久七年（一一九六）十二月以降であると大林氏^(注26)が史料から明らかにし、この詞書が書かれたのはそれ以降であると論じている。つまり、官位官職、居所、没年など歴史的事実によって和歌の詠まれた年次、実際に記載された年次が推定されるため、諸家の間で推定される本集の最終的な成立年次にはそれほど大きな相違が出ないことも多い。各説を分かちつのは、歌集の内容構成からどこに大きな内部分区を置くか、そしてそれが成立時期や成立過程と如何に関

わるかという点についての論者の見解であると思われる。

これら㊦㊦説に共通するのは、上下巻がその順に成立したと考える点である。従来自明と考えられてきた成立順であるが、これに異論を呈したのが四の下巻先行成立説であった。ただし久徳氏は「下冊とよばれている部分の大半が、じつは最も早く書き出され、上冊の部分のこれまた大半が、それに続いて書きつがれた」との大筋を述べるに留まっている。他方、萩原氏は年次表現の詳細な差異を析出し、下巻の二五八番歌までが最初に形をなし、その後かなりの年月を経てから上巻とそれ以降の下巻がほぼ同時期に編まれたと述べる。

この萩原氏の論を踏まえ、また次に言及する四の佐藤氏の論をも受けて、さらに考察を発展させたのが谷氏の論である。谷氏は、下巻の七夕歌群まで（三二一番歌まで）が先に成り（成立時期は㊦①説と同じ文治三〜四年（一一八七〜八八）頃）、後年、手許にあつた歌草をもとに上巻と下巻後半部が書かれたとみている。

従来の成立説を大きく問い直したこの四の説には肯かされる点も少なくないと稿者は考えているが、その後、研究史の中で言及されることは多くないのが現状である。

四の説は、最終段階において一貫した構想のもと改訂されたとする佐藤氏の論である。この論の根幹は、本集の上巻の歌や詞書の表現に『新古今集』（元久二年（一一〇五）竟宴）の影響を受けたものが見られるという指摘である。

加えて佐藤氏は、これまでも指摘されてきた資盛没後に詠ま

れたことが窺い知れる上巻の歌や叙述に、さらに新たな分析を加える。本集には、□説などが指摘するようにいくつかの断層が認められ、それぞれの部分に構想や意図があり、それを編纂の最終段階において再構成して現存『右京大夫集』は成立した、と結論づけている。そして、その最終段階としては『新勅撰集』の撰集資料として定家から歌を求められた時、すなわち貞永元年（一二三二）ごろを想定している。

なお本集に最終的なまとめの段階があったとする視点は、既に渡辺静子氏（□①説）、後藤重郎氏、久保田淳氏^{（注27）}らによっても示されていた。他にも、□説に立つと明言する大林潤氏の⑥論文にも、原段階の歌集があり、そこに最終的な加筆があったとの見方が書き添えられている。

つまり、□説と□説以下は対立関係でも二者択一の関係でもないとする佐藤氏の論は的を射ていることになる。「それぞれの部分が執筆された当初の段階と、一貫した構想のもとに補筆や削除、改稿などの手が加えられた段階という、少くとも二段階があったのだと考えることによって、両者は十分に融合可能」とする氏の見解は、諸説を止揚する包括的な成立論と言えるのである。

二 編纂の概要についての私見

従来の成立論を整理してみたが、これらの論で初期のものには以下の二つの問題点が含まれていることが多いと思われる。

第一は、歌集の成立時期の推定の方法である。前章で例に挙げたように七二番歌の詞書「大炊の御門の斎院、いまだ本院におはしましし比……」は有効な年次推定の材料である。しかしそこから言えるのは、当該歌が平治元年（一一五九）～嘉応元年（一一六九）の間に詠まれ、その詞書が書かれたのは建久七年（一一九六）以降であることだけであろう。ところが、この詞書を根拠として、この七二番歌が置かれている上巻の前半部すべて、あるいは上巻全体までもが建久七年（一一九六）以降に成立した、とみなすような論の進め方がなされることがなきにしもあらずであった。これは、『右京大夫集』の研究史の初期段階においてしばしば見られた大きな難点であろう。

第二は、本集の「成立」もしくは「編纂」という語が、いささか曖昧に使用されてきた点である。各論を摺り合わせる場合、これらの言葉が論者によって異なると、建設的な議論をすることは難しいと思われるのである。この点を明確にするため、本集の所謂「跋」の前半をあらためて見てみたい。

返す／＼うきより外の思ひ出でなき身ながら、年はつもりて、いたづらに明かし暮らすほどに、思ひ出でらるゝ事どもを、すこしづゝ書きつけたるなり。おのづから人の「さる事や」といふには、いたく思ふまゝの事はゆくもおぼえて、せう／＼をぞ書きて見せし。これはたゞ我が目ひとつに見むとて書きつけたるを後に見て、

碎きける思ひのほどの悲しさも書きあつめてぞさらに知ら

る、(三五七)

これを踏まえると、歌集の編纂は一度限りの営為ではなく、複数回なされたと考えるのが自然であろう。それぞれの段階で編まれた歌集を次のように考えたい。

① 自身の手控の歌集

② 他者の求めで一部を書き抜いた歌集

③ 『新勅撰集』の資料として定家に示した歌集

先の引用箇所で傍線を付したものが①の歌集であり、波線を付したものが②の歌集となろう。そして最終編纂をなした歌集が③で、今日現存するものに近いとみなしておく。また、本稿ではやや自然発生的にも読めてしまう「成立」の語ではなく、自覚的な行為にあたる「編纂」の語を用いて論を進めることにする。

まず①の歌集は草稿本にあたるが、これは新たな伝本などが出現するような僥倖に恵まれない限り、どのようなものであつたかは不明と言うしかない。ただし、この箇所の書き方から①は、②よりも歌数が多かつたことは窺い知れる。

近親者やごく親しい友人ならば、①の歌集そのままを見せても問題はなからう。しかし、詞書の波線部のような要請をなした「人」は少し距離のある人々であると思われる。すなわち歌人として交際がある人、再出仕先の同僚・知人などが考えられ、当然ながら歌集がその人々から世に広がる可能性は高い。右京大夫は再出仕した後鳥羽院・七条院に仕えたというのが今日の定説であるから、その周辺で歌集が読まれることになる。

後鳥羽天皇（高倉天皇四宮）は、建礼門院所生の安德天皇（高倉天皇一宮）が平家都落に伴われて西下した後に、祖父の後白河院に擁立されて即位している。平家が三種の神器を手放すことがなかったため、後鳥羽院は神器なしに即位したとのコンプレックスを終生拭い去ることができなかった。平家滅亡後、後白河院そして後鳥羽院は、鎌倉幕府との協調関係をとまかくも維持しながら世を治めてゆくことになったのである。

こうした背景を考え合わせると、源氏と戦闘に及んだ平家の一門の名前が明示される詞書や歌、あるいは平家都落ちや滅亡を悲嘆する詞書や歌を右京大夫が流布させることはあり得ないと思われる。①の歌集にはこのたぐいの詞書・歌が含まれていたとしても、それらを除いたものが②の歌集であつたと稿者は想定するのである。

では、この仮説の妥当性を、同時代の文学作品に徴して検討してみたい。まず勅撰と歌集の場合であるが、後白河院の命によつて文治三年（一一八七）に撰集された『千載和歌集』については、『平家物語』『忠度都落』などがすぐに思い起こされるであろう。都落ちにあつて撰者の藤原俊成に自らの詠草を託したと描かれる平忠度であるが、集に採られた唯一の歌は「読み人しらず」とされる。武門平氏の経正・経盛の歌も同様の扱いである。なお、同じ平氏でも清盛の父・忠盛や、文官平氏の時忠・親宗は実名で採歌される。他方、後鳥羽院が下命、かつ撰歌に心血を注ぎ、元久二年（一二〇五）に竟宴を行った『新古今和歌集』では、上述のような扱いの歌さえも消え、わずか

に教盛母や親宗の歌が実名で入集するのみである。

また、『右京大夫集』と重なる時代を描く日記『たまきはる』のあり方はより示唆的である。作者・健御前は保元二年（一一五七）生で定家の同母姉であり、『たまきはる』は建春門院・八条院・春華門院の三女院への宮仕えの思い出を年代順ではなく、連想によって紡ぎつつ描く。序・奥書によれば建保四年（一二二六）ごろに起筆、建保七年（一二二九）擱筆であつたらしい。この日記の構成は、作者自身がまとめた本編（第一部）の後に性質の異なる複数の奥書がつき、さらにそれに続いて、作者の没後に定家が遺稿から拾い出した第二部が置かれるという独特のものである。

奥書からは、現存する『たまきはる』（第一部＋第二部）の配列や文章に定家やその周辺の人物が関与したことが見て取れるが、そのみならず、作者が残した記事には、第二部にも留められることなく捨て去られたものもあつたことを稲村栄一氏・藤川功和氏らが推定する^{（注20）}。処分されたものは、三女院の麗質を伝えるという日記の主題から外れると思われる記事、あるいは他見を憚る記事であつたという。

こうした先行研究を踏まえつつ、あらためて『たまきはる』を眺めると、平清盛の正室・時子の妹にあたる建春門院の美しさや聡明さ、あるいは巧みな後宮運営ぶりを余すところなく描き出すものの、女院の華やかな生活を支え、常に圍繞していたはずの平家一門の姿が第一部にはまったく描かれていないことに気づかされるのである。わずかに第二部にのみ、平清宗（宗

盛男）が一門の平頼盛の婿となった姿を描出し、健御前がその幼少時を回想するくだりがあり、「その秋、その人くみな発ちて、跡もなくなりにき」と平家一門の都落ちと滅亡を示す一文で結ばれる^{（注21）}。この箇所を第一部から除いたのは作者自身であるのか、定家であるのか不明であるが、切り出しの理由は明らかであろう。そして、作者や定家らが処分して今日見ることが叶わない文章には、同様に平家一門を描いた記事がさらにあつたことも容易に推察できる。

以上のような同時代の文学作品のありようから、②の歌集についての稿者の考えは大筋として外れてはいないと思われるのである。

それでは②のかたちで『右京大夫集』が読まれたのはどの時期であつたのだろうか。これは後鳥羽天皇の御世、そしてその院政下（土御門・順徳・仲恭天皇の御世）であろう。しかし、承久三年（一二二一）五月の承久の乱で状況は一変する。鎌倉幕府の討伐を企てた兵乱は短期間で幕府軍の大勝に終わり、直接の首謀者である後鳥羽院・順徳院は隠岐・佐渡にそれぞれ配流、四歳の仲恭天皇は廢位、さらに倒幕に反対していた土御門院も自らの意志で土佐へ遷幸する。七月、高倉天皇の二宮・守貞親王（出家して行助法親王）の皇子が十歳で後堀河天皇として即位、皇統は刷新され、守貞親王も後高倉院と尊称されることになる。

当然ながら、天皇家のみならず公家社会にもきわめて劇的な変化が招来するのであり、それについては歴史学の研究に詳し

いが、文学との関連については軍記物語研究のサイドから日下力氏が丹念に論じている。^{注30}

守貞親王（のちの後高倉院）は後鳥羽院の同母兄であったが、平家都落ちに際して幼帝・安徳天皇の後嗣と目されて西国に伴われ、壇ノ浦の合戦後、帰洛した。日下氏が特に着目したのは守貞親王の乳母で、一人は平知盛（清盛男）室の治部卿局、いま一人は平頼盛（清盛の異母弟）の女であった。加えて守貞親王は、平頼盛の女と藤原基家の間に生まれた陳子（のちの北白河院）を妻とする。そこに誕生したのが後の後堀河天皇であり、新時代の天皇は平家の血を引く人々の中で生まれ育ったのであった。

承久の乱の後には、後鳥羽院時代が否定されるのは至極自然である。そして一方では、遠い昔となった平家文化を懐かしみ、再評価する雰囲気醸成されることになる。それが後堀河天皇（在位一二二一―一二三二）と、その皇子の四条天皇（在位一二三二―一二四二）の御世であった。こうして平家滅亡から約半世紀となる一二三〇年代から一二四〇年代に、『平家物語』や『保元物語』『平治物語』『承久記』の軍記物語四作品の原型が成立する、これが日下氏の述べるところである。

叙上の皇統の刷新と社会情勢の変容の中でこそ、『右京大夫集』も平家に関わる詞書や歌を盛り込んで、公の場に出すことが可能になるのではないだろうか。右京大夫が、元々①の歌集にあった詞書・歌を復活させた箇所もあろうし、新たに詞書や歌を増補した箇所もあろう。また既にあった詞書・歌を修正し

た箇所があっても不思議ではない。このようにして③の最終段階の『右京大夫集』が編纂されていた、と稿者は考えるのである。

三 最終段階の編纂のあり方

本稿が基本的に佐藤氏の④の論を支持することは既に述べてきたが、三章では佐藤氏の説を踏まえつつ、具体的に最終編纂段階でどのような改修が行われたかについて検討する。

まずは改修は大きく二分できよう。第一は、本集の表現に關わるものである。これは佐藤氏が指摘された『新古今集』の影響を受けた歌や詞書にあたり、『新古今集』が世に広まってからであれば撰取することは可能である。承久の乱などとは關わりなく、ある程度早い時期からなされていても不思議ではない。第二は、資盛追慕・武門平氏の人々への哀惜という本集の内容に關わる改修である。これは既に指摘されてきたものを含み込んで、次のように細分化しておく。

【一】 武門平氏の運命を見届けて後の作者の感慨を含む詞書および歌

【二】 武門平氏の運命を見届けて後、物語化の志向を強めた表現となった詞書および歌

【三】 武門平氏の実名が含まれる詞書、実名の作者名

【四】 武門平氏の都落ち・死などが描かれる詞書および歌
それぞれ性質の異なる改修であり、研究の土台として類別して

おくことが必要であらう。

まず【一】は、誰でも気がつく箇所、夙に多くの論者が言及しているのであるが、一例を挙げておく。

なにとなきことを、我も人もいひしをり、思わぬ物の
いひはづしをして、それをよくいはれしも、後に思へ
ばあはれにかなしくて

なにとなく言の葉ごとに耳とめてうらみしことも忘れぬ
かな（一九九）

資盛と思われる「人」と「我」の些細な言葉の行き違いの思い出であるが、詞書の傍線部も歌の波線部も、明らかにやり取りが行われた後、おそらくは資盛没後の作者の感慨が混じるものである。類例として、一五・一六番歌や一六四・一六五番歌などが挙げられ（ただし後者の歌群の詞書には通盛の実名が含まれている点が他の例とは異なる。これについては後述）、これらはいずれも上巻に位置している。

次の【二】は、物語化の志向・創作的意図から、上巻の一六六～一七三番歌の歌群に最終段階で加筆がなされた可能性を佐藤氏が指摘する箇所である。氏はさらに六一～六八番歌の歌群を「恋の進行、起伏を、まるで勅撰集の配列のように綴っている」とみる。これらから、本集には最終的なまとめの段階で細部の歌の配列や詞書などにも手が加えられ、「結果として、部分的にかなり事実からは遠ざかった、明らかに読者を意識した文学として完成することをえた」と考えるのが氏の論である。^(佐藤)『石京大夫集』研究における不可欠な読みの視点を提示するも

ので、首肯される。

以上に加え、稿者は最終編纂段階において、武門平氏に関わる記載の改修もまたなされたと考えている。これを【三】【四】としておいた。

【三】は、武門平氏の実名が詞書に含まれる、あるいは歌の作者として実名が記されるもので、上巻では次の歌が該当する。六・七番歌（権亮維盛）、八番歌（宮亮重衡・権亮維盛）、九・一一番歌（重衡・維盛・資盛の少将）、五六番歌（小松のおとゞ）、五七番歌（おなじおとゞ・おとうとの右大将）、五八番歌（小松のおとゞ）、五九・六〇番歌（八島のおとゞ）、七四・七五番歌（清経の中将）、八四・八五番歌（権亮維盛の上）、八八番歌（知盛の中将）、八九・九〇番歌（三位中将維盛の上）、九一・九二番歌（忠度の朝臣）、九四・九五番歌（権亮・経正の朝臣）、一〇二～一〇五番歌（小松のおとゞ）、一二六番歌（維盛の少将）、一六四・一六五番（通盛の朝臣）、一九四～一九七番歌（宮の亮）

なお一九四～一九七番歌の「宮の亮」は、八番歌に「宮亮重衡」とあることから人物特定ができる。また実名でなくても居所＋官職で「小松のおとゞ」が重盛、「八島のおとゞ」が宗盛であるのも作者と同時代の人々には自明であると思われるので、ここに含めた。^(佐藤)

こうした人々の実名は、①の手控えの歌集なら記載されていたことであろうが、②の歌集ではどうなったのだろう。まず、これらの歌と詞書を歌集から除くという方法が考えられる。あ

るいは臚化表現を採用するという方法もあろう。他の私家集で

も恋愛に関する歌では臚化表現は普通のことであるが、『右京大夫集』でも、先に本章で引用した一九九番歌の詞書「なにとなきことを、我も人もいひしをり」のように資盛を「人」とするような例は多数ある。また七六・七七番歌詞書「とかく物思はせし人の殿上人なりしころ、父おとゝの御供に…」の傍線部も資盛で、「父おとゝ」があるため少し危ういものの臚化表現である。

これ以外の恋愛に関わらない箇所であっても、同じように臚化表現を採れば多くの歌を②の歌集で切り出さずにすむ。そして後に、③の歌集でこれらの箇所を実名表記に戻すのはそう難しくなさそうである。

如上の推定には、作者と深く関わった男性の一人である藤原隆信の歌集が参考になる。隆信には、二種類の自撰歌集があり、一つは隆信四十一歳の寿永元年（一一八二）ごろ撰の歌集（寿永本）で百首余りが収められる。今一つは、隆信が死去する一年前の元久元年（一二〇四）あたりで編纂されたもので、九六〇首の大部の歌集（元久本）である。

寿永本と元久本には重複歌もあり、例えば隆信が「いせ」という女性と交わし合った寿永本の四首（九一〜九四番歌）は、元久本の四首（六二〇〜六二三番歌）と重なる。しかも、元久本は寿永本にはない、隆信と「いせ」とのやり取りの六首（六一八・六一九番歌、六二四〜六二七番歌）を追加している。加えて、元久本はそれにあたって詞書についても若干の改修を

なしているのである。^(注33)

本稿の論旨に関わる部分のみ抜き出せば、寿永本で「院のくらゐの御とき」という詞書が、後年の元久本では「後白河院、くらゐにおはしましし時」となり、いずれの御代か明らかにされる。また寿永本が「たかまつの院の御かたに候いせといひし人」とする箇所を、元久本は「たか松の院の東宮の女御にて、しげいしやにおはしましし御かたに、いせのごといひし人」とし、高松院が東宮（のちの二条天皇）の女御であつて、淑景舎にいた時のことであると一層状況を具体的にしていることがわかる。この『隆信集』のように、『右京大夫集』においても②と③の歌集で表現を変えたことはあり得よう。

最後に【四】平家一門の都落ち・死などが描かれる詞書および歌を見てゆくが、これは当然ながら下巻に限定される。その中でも以下に挙げる詞書はかなり直接的な描写があり、当該箇所を後鳥羽院が治天の君であつた時代に流布させることは難しそうである。なお詞書は長大なものが多いので、特に問題となりそうな部分のみ抜き出して示すことにする。

二〇四番歌

寿永元暦などのころ、世のさわざは…見し人々の都別る
と聞きし秋ざまの事…

二〇七番歌

おそろしき物のふども、いくらも下る。

二一一番歌

近く見し人々むなしくなりたる、数おほくて、あらぬ姿

にて渡さる、…

二二二・二二三番歌

重衡の三位中将の、うき身になりて、都にしばしときこえしころ…

二二四・二二五番歌

「維盛の三位中将、熊野にて身を投げて」とて…

二二六・二二七番歌

この三位中将、清経の中将と、心とかくなりぬるなど…平家一門の都落ち、平家討伐軍の西下、重衡をはじめとする平家の人々が生け捕りとなつて都に護送されたこと、そして資盛の兄弟である維盛・清経の自害など戦慄を覚えざるを得ないような生々しい記載であり、その扱いの難しさは十分に想像できるのである。

それと比べると、資盛の死を嘆く詞書・歌は、資盛の実名は示されないまま、作者自身の惑乱の状態や悲痛な心情を描くのみであり、許容範囲なのかもしれない。もともとその中で、下巻前半部の二二二～二二九番歌、二二八番歌、二二六八番歌や、下巻後半部の三二七～三二九番歌のあたりは他人の眼に触れるのは憚られるものと言える。また、大原に建礼門院を訪ねる二二九～二四一番歌も差し障りがある内容と思われる。

これらの歌も①の歌集ではあったのかもしれないが、②の歌集から除かれたのではないか。そして、その後、最終段階の改修を経て現存の形に近い③の歌集が大方の眼に触れることとなった、というのが現時点の稿者の想定である。

四 再出仕後の歌群の選択

最後に下巻後半部、所謂「再出仕歌群」に目を移すが、その部分は次の内容である。

- (1) 再出仕した宮中のありさま (三三二～三三九番歌)
- (2) 籠居した藤原隆房との歌の贈答 (三三〇・三三一・三三二番歌)
- (3) 藤原実宗死去、子息公経への弔問 (三三二・三三三番歌)
- (4) 平親宗死去、子息親長への弔問 (三三四～三四八番歌)
- (5) 源通宗との歌の贈答、その死去、資盛想起 (三四九～三五三番歌)
- (6) 俊成九十の賀 (三五四～三五六番歌)

先行研究でそれぞれの歌が詠まれた時期が検討されているので、それを踏まえ並べ替えてみると、おおよそ(1)一一九五～一一九六年、(5)一一九八年、(4)一一九九年、(2)一二〇〇年、(6)一二〇三年、(3)一二一三年となり、年代順とは異なる意識的な配列がなされていることが窺える。そして末尾には一二三二年ごろと思われる定家と作者の歌の贈答(三五八・三五九番歌)を記す跋が付く。

この再出仕歌群の配列・内容については丹下暖子氏の専論がある。^(注27) 下巻を丹念に読み込み、「昔のこと」を語り合う人の存在があった下巻前半部に対し、下巻後半部ではその不在が繰り返し語られ、作者のみがその「昔のこと」を語る人物であると位置づけられているとする。そこに『右京大夫集』編纂の意義があったことを見出すもので、『右京大夫集』の大きな枠組み

を捉える、すぐれた視点を提示している。

一方、歌道の泰斗である俊成・定家父子に関わる記事をひとまず切り離し、それ以外の人物に着目した藤田一尊氏の論もある。藤田氏は、(2)隆房への慰問↓(3)公経への弔問↓(4)親長への弔問という記事の配置を「平家滅亡後の後鳥羽院宮廷に生き残った親平家の人々の小グループを、姻戚関係によって連想的に思い出しつつ、関連する歌を並べたもの」と捉えている。

ちなみに続く(5)の通宗に関しては、時の権力者(通宗の父は源通親)の男ながら若くして世を去ったことが資盛と重なることから一連の歌が採録された、というのが通説である。これに対し、藤田氏に賛同する立場の弓削繁氏は、通親が「親平家的な心情」を持ち続けていたことを(5)の採歌の背景に加えている。^(注38)

藤田氏の述べる姻戚関係は指摘の通りであり、通親が高倉院近臣・親平氏派公卿であったことも確かである。しかし、平家滅亡後、通親は時代に巧みに適応し、後白河院近臣として幕府との良好な関係を築き、また後白河院崩御後は後鳥羽院歌壇の重鎮となつてゆく。(5)の歌の時点では、通親はもはや到底「親平家的」とは言えない。^(注39)

『右京大夫集』に最終段階の編纂を想定する稿者としては、これらの再出仕歌群もその歌が詠まれた年次からではなく、最終段階の年次から採歌の背景を考えてみる必要があると考えるのである。(ただし(1)は自詠歌のみであるため除外しておく) 論述の都合上、(3)藤原(西園寺)実宗が建暦二年(一二二二)十二月に亡くなった翌年の五節、追悼の歌(作者は代詠であつ

た)の贈答から見てゆく。久安元年(一一四五)生かとされる実宗は、琵琶の家と言われる西園寺家の中でも殊に名手であり、大神家の血を引く作者との若き日の交友が本集上巻に描かれていた。それに対し、子息の公経は承安元年(一一七二)生で作者とは世代も異なり、(3)以外には本集に登場しない。(3)が本集に採録される理由が一見わかりにくい。

これは公経の経歴を辿る必要がある。公経は、源頼朝の姪(頼朝の同母姉妹である坊門姫と一条能保の間に生まれた女子)を室とし、親鎌倉幕府派で関東申次となった。後鳥羽院政下では不遇の時期もあり、承久の乱においては後鳥羽院方に付かず、京の情勢を鎌倉に伝えている。乱後、後堀河天皇擁立に働いた公経は、後堀河・四条天皇の御世には朝廷で権勢をふるった。

その後堀河天皇の御世に本集を最終的に編纂するなら、(3)の公経との歌の贈答は、本集に入れるべきものと作者が判断しても不思議ではなからう。これにより、上巻に置いた実宗との古き時代の交友も一層箔づけられるとも言えるかもしれない。

しかも、公経は定家とも関係が深い。定家は公経の姉を正室とし、定家の嫡男である為家はこの室を母として建久九年(一一九八)に誕生した。そのため公経は定家・為家の政治的な庇護者でもあった。例えば、嘉禄元年(一二二五)十月ごろより為家は藏人頭を望んで様々な働きかけをし、同年十二月に任官が成就するのであるが、それにあたり後盾となったのが公経であったことを日下氏が『明月記』の一連の記事から抽出している。すなわち、田淵句美子氏も述べる^(注40)ごとく、『新勅撰集』

の撰者である定家への意識もまた(3)の採録の背景にあるとみてよいと思われる。

さらに定家の後援者としては、公経に加えてもう一人、看過できない人物がいた。藤原成親を父に、俊成女である後白河院京極局を母にもつ成子である^(注2)成子は持明院基宗の室で、後堀河天皇の乳母として大きな権力を持ったとされる。女・宗子をも四条天皇の乳母とすることに成功した成子は、後堀河・四条天皇の御世に「権女」と呼ばれる存在であり、嘉祿三年(一二二七)正月、二位に叙せられている。

この成子は、定家だけでなく隆房とも浅からぬ関わりがある。京極局は定家の異母姉であるので、定家にとつて成子は姪にあたる。また成子の父・成親と隆房の父・隆季は異母兄弟であるから、成子と隆房はいとこ同士ということになる。隆房は勅撰集に三十四首入集、『隆房集』を編み、また後白河院五十賀を記録した『安元御賀記』をなしてもいるが、承元三年(一二〇九)に世を去り、本集の最終編纂段階では既に「過去の人」とも言える。それにもかかわらず(2)が採録された理由に、後堀河・四条天皇の御世、大きな力をもつ成子への忖度がまったくなかったとは考えにくそうである。

一方、(4)の平親宗と子息の親長については、ともに本集ではこの箇所以外の採歌はない。ただ、(2)(3)がそれぞれ一組二首の採歌であるのに比して、十五首もの歌が残されるのである。文官平氏の親宗は、異母兄・時忠とは異なり、清盛に距離を置き、後白河院近臣として正二位、左大弁中納言に至った。^(注3)また、そ

の男で作者と歌を贈答し合った親長の方は、従三位、治部卿が最終位官である。ただし親長は成子の近臣として、早くから後堀河天皇の母・北白河院の院司に加えられていたことが『岡屋関白記』貞応元年(一二三二)十二月二十五日条や元仁元年(一二三四)十二月二十日条から知られる。^(注4)また後堀河天皇の近臣でもあったらしく、『民経記』寛喜三年(一二三一)三月二十七日条に「近習人々候御前」とある中に「治部卿親長卿」との記載も見える。^(注5)「権女」成子の意を迎えることで時流に乗り、後堀河天皇やその母後の北白河院に近侍する親長との贈答歌群ならば、本集に入れておく価値はあるという判断が右京大夫によつてなされることもあり得よう。

ここまで(2)(3)(4)について『右京大夫集』の最終編集段階からその採録意図を考えてみた。そこには、当代の政治的情勢や社会状況を踏まえた右京大夫の選択があったと考えられそうである。ただ(5)については現時点では通説が妥当であると考ええる。通宗と資盛は享年、官職などに近い点が少なくなく、^(注6)資盛を想起する契機として持ち出されていると見ておく。

最後に(6)であるが、建仁三年(一二〇三)俊成の九十の賀において後鳥羽院が下賜する法服に以下の歌(宮内卿が代詠)を刺繍する役を右京大夫が仰せつかったことが記される。

ながらへてけさ^さうれしき老の波八千代をかけて君につかへむ(三五四)

ところが、儀式直前に下された院の命によつて「ぞ」を「や」に、「む」を「よ」と糸を置き直したらしい。それにより拝領する

俊成の歌ではなく、下賜する院の歌となるよう何とか取り繕うことができたのである。

ここで名譽の役が与えられた宮内卿は、当時歌道に傾注していた後鳥羽院の歌壇で、俊成卿女と並び称されていた女流歌人である。それに比して、右京大夫の評価は低く、『新古今和歌集』に右京大夫の歌は採られない。さらに以下の『明月記』建永元年（一二〇六）七月十二日条からは一層厳しい状況が窺い知れる。

昨日朝五首題給^{（注）}二十人、今夜詠進、可^レ有^{（注）}三歌合、大納言兼宗卿、太理、季経卿（入道）、経家、頭家、隆保、通方朝臣、七条院右京大夫、賀茂重政、蓮重、内々仰云、他宗哥合、為^レ咲^{（注）}三其哥^{（注）}、故被^レ召^{（注）}之、所^{（注）}三詠進、有^{（注）}二宜哥^{（注）}二云々、

後鳥羽院が歌の躰を笑う目的で十人の歌人に五首ずつ歌を詠ませたというもので、その中に「七条院右京大夫」の名も見えるが、これが作者にあたることを遠田晤良氏が夙に指摘し、その後、久保田淳氏、兼築信行氏、田渕句美子氏もこれに賛同する^{（注）}。では、宮内卿の歌に作者が不審を覚え、果たせるかな後日、修正の命が下ったという秘話を本集に入れて他者に見せることが容認されるのはどの時点か。宮内卿への批判は、すなわちその任命者である後鳥羽院への批判となる以上、九十の賀の当座はむろんのこと、後鳥羽院が治天の君である間はあり得ないだろう。やはり承久の乱後、本集編纂の最終段階に近いところで(6)のこの秘話が入れたとみるのが自然ではないかと考えて

いる。(6)もまた(2)(3)(4)と同様、時代の影響から無縁ではないと思われるのである。

おわりに

承久の乱の後、後堀河天皇の御世に『右京大夫集』の最終段階の編纂が行われたと想定し、本集を読み直してきた。既に述べたように後堀河・四条朝で「権女」として知られた成子であるが、彼女は平維盛の室となった新大納言局の同母姉であった。『右京大夫集』には維盛周辺の人々の記事・歌がかなり多いが、それは維盛が資盛の兄であるという理由に拠るだけではなさそう、本稿で見てきた絡み合う人間関係も要因の一つとなっているようにも思われてくる。

ともあれ、『右京大夫集』を読み解くにあたっては、本集が今日我々が目にしているものとは異なる様相を呈していた時期もあったことを念頭に置く必要があるのではないだろうか。本集は作者自身によって数度の編纂が行われた——こうした視点をもちつつ、稿者もさらに本集の分析を進めたいと考えている。

注

*本稿における『建礼門院右京大夫集』本文の引用は、九州大学附属図書館細川文庫本を底本とした石川泰水・谷知子『式子内親王集 俊成卿女集 建礼門院右京大夫集 艶詞』（和

歌文学大系、明治書院、二〇〇一年）により、歌番号も同書による。私に傍線などを付した。

* 本稿で考察する人物関係はやや煩雑なため、二種類の系図を付した。ご参照いただきたい。

(1) 「正元二年二月二日書写畢」の奥書をもつ細川文庫本などは三五九首。他本で二首補うことができる。

(2) 本稿では、上冊・下冊の語ではなく、上巻・下巻の語を使うことにする。

(3) 佐藤恒雄「建礼門院右京大夫集の成立―新古今和歌集からの影響歌を起点として―」（『国文学 言語と文芸』八七号、一九七九年三月）。本稿で引用する氏の論は、すべてこの論文による。

(4) 野沢拓夫「『建礼門院右京大夫集』研究の展望と問題点」（女流日記講座第六巻『建礼門院右京大夫集・うたたね・竹むきが記』勉誠社・一九九〇年）。

(5) 谷知子『中世和歌とその時代』（笠間書院、二〇〇四年）第五章第二節（初出は一九九四年）、および第五章第四節（初出は一九九五年の論文と二〇〇一年の著書「解説」）。

(6) 富倉徳次郎『建礼門院右京大夫・皇太后宮小侍従』（三省堂、一九四二年。復刊『王朝の悲歌―建礼門院右京大夫集―』弘文堂、一九七〇年）。

(7) 佐佐木信綱『中古三女歌人集』（朝日新聞社、一九四八年）。

(8) 山田昭全「建礼門院右京大夫集雑考―その回想の性格を

中心に―」（『国文学踏査』五号、一九五八年三月）。

(9) 奥村寿美子「『建礼門院右京大夫集』の構想」（『藤女子大学国文学雑誌』九号、一九七一年三月）。

(10) 大林潤^a「建礼門院右京大夫集成立に関する一推論―七夕歌成立年時と後鳥羽天皇出仕時期―」（『国文学攷』六〇号、一九七二年十二月）、^b「建礼門院右京大夫集成立に関する一推論（二）―大炊御門斎院の呼称をめぐって―」（『国文学攷』六二号、一九七三年六月）。

(11) 後藤重郎^a「建礼門院右京大夫集七夕歌に関する一考察」（『名古屋大学文学部研究論集』五二号（文学一八号）、一九七一年三月）について、注（4）野沢論文と注（5）谷著書は□一括成立説に分類するが、当該の後藤論文は下巻の七夕歌群までとそれ以後の成立が同時期であると論じているものであって、上巻と下巻の成立時期の関わりについては言及していない。むしろ後藤氏の見解は^b「建礼門院右京大夫集題詠歌群に関する一考察」（『名古屋大学文学部研究論集』五五号（文学一九号）、一九七二年三月）に「右京大夫集は決して一時に書き下されたものではなく」「書き継がれ、書き継がれて行ったものではなからうか」とするところにあるう。

(12) 本位田重美『評註建礼門院右京大夫集全釈』（紫乃故郷社、一九五〇年。改訂版、武蔵野書院、一九七四年）、『古代和歌論考』（笠間書院、一九七七年、初出は一九六四年）。

(13) 遠田晤良「建礼門院右京大夫私考Ⅱ―歌集編纂時期をめ

ぐって―」〔『国語国文研究』二二号、一九六二年八月〕。

(14) 渡辺静子「『建礼門院右京大夫集』における日記文学の世界」〔『清和女子短期大学紀要』二号、一九七〇年八月〕。

(15) 野沢拓夫^{a)}「『建礼門院右京大夫集管見―前半の主題と構想―」(『日本大学』『語文』五一輯、一九八一年五月)、野沢拓夫^{b)}「『建礼門院右京大夫集について―上、下巻の間の擱筆の可能性などをめぐって―」(『日本大学』『語文』六六輯、一九八六年十二月)。

(16) 信太周「『建礼門院右京大夫集考―上・下両巻の間における擱筆の想定をめぐって―」(『国文学 言語と文芸』五巻五号、一九六三年九月)。

(17) 玉井幸助「『日記文学の研究』(塙書房、一九六五年)。

(18) 八嶋正治「『建礼門院右京大夫集の構造』(『文芸と批評』三巻七号、一九七一年十月)。

(19) 草部了円「『世尊寺伊行女右京大夫集』(笠間書院、一九七八年)。

(20) 伊狩正司「『建礼門院右京大夫集構想論のための覚書(二)―九州大学本と吉水神社本との成立の先後をめぐる一試論―」(『日本大学』『語文』一七輯・一九六四年三月)。

(21) 久徳高文「『国文学草径』(桜楓社、一九七四年)。

(22) 萩原真佐子「『建礼門院右京大夫試論―歌集編纂時期と編纂意図をめぐって―」(『国文目白』二三号、一九八四年二月)。

(23) 注(5) 著書。

(24) 注(3) 論文。なお注(5) 著書では、樋口芳麻呂「建

礼門院右京大夫集の発端」(『日本文学の伝統と歴史』桜楓社、一九七五年)の論も因説に含める。しかし樋口氏は、『右京大夫集』二・三・八番歌の詞書は歌が詠まれた段階のものでなく、後年の書き直してあることを論じているが、因説のごとき成立説までは言及していないと思われる。

(25) 注(10) 論文^{b)}。

(26) 注(11) 論文^{b)}。

(27) 久松潜一・久保田淳校注『建礼門院右京大夫集』(岩波文庫、一九七八年)の解説。

(28) 稲村栄一「『たまきはる』(建春門院中納言記)の構成と諸問題」(『島大國文』一〇号、一九八一年十二月)、三角洋一「『新日本古典文学大系』とはずがたり たまきはる」(岩波書店、一九九四年)解説、藤川功和「『たまきはる』の成立と定家―遺文構成の方法―」(『国語と国文学』七九巻七号、二〇〇二年七月)、同「健御前の言説―『たまきはる』成立の階梯―」(『国語と国文学』八一巻三号、二〇〇四年三月)。(29)「『たまきはる』の本文は新日本古典文学大系」(岩波書店)による。

(30)『平家物語の誕生』(岩波書店、二〇〇一年)。本稿で引用する日下氏の論は、同著による。

(31)これに続いて谷氏も、相互にさほど関連がないように見える六一〜六四番歌を、歌の表現から佐藤氏とは別の視点で新たに分析し「共通したテーマと素材で構成された一歌群」と位置づけている。

(32) これ以外に八一・八二番歌(宮の権大夫時忠)があるが、時忠は建春門院滋子の兄で文官平氏であり、『千載和歌集』にも実名で採歌されているため、②の歌集に入っていない問題となることはなさそうである。

(33) 樋口芳麻呂「藤原隆信の恋」(『国語と国文学』五二巻二号、一九七五年二月)が夙に指摘をなしている。

(34) 引用は『冷泉家時雨亭叢書 中世私家集一』によるが、「候」の左にはミセケチの符号、右には「こ」と傍書あり。

(35) 引用は『国歌大観』所収の『隆信集』(龍谷大学蔵本)の本文。

(36) 久保田淳校注・訳『新編日本古典文学全集 建礼門院右京大夫集 とはずがたり』(小学館、一九九九年)、辻勝美・野沢拓夫『中世日記紀行文学全評釈集成 第一巻 建礼門院右京大夫集』(勉誠出版、二〇〇四年)は、これを元暦二年(一一八五)正月に亡くなった父隆季の服解の間かとする。

一方藤田一尊「藤原隆房のなげき―『建礼門院右京大夫集』私見―」(『解釈』三六巻四号、一九九〇年三月)は、隆信が正治二年(一一二〇)三月に中納言を辞し、建仁四年(一一二四)正月遷任までの籠居の期間とし、支持したい。なお正治元年(一一九九)十月に隆房の北の方(平清盛女)が死去していることもあり、一二〇〇年が最有力かと考える。

(37) 丹下暖子『建礼門院右京大夫集』再出仕歌群の位置づけ(『詞林』五一号、二〇二二年四月)。

(38) 注(36) 藤田論文。

(39) 弓削繁『建礼門院右京大夫集』と藤原俊成(後藤重郎先生算賀世話人会編『和歌史論叢』和泉書院、二〇〇〇年)。

(40) 橋本義彦『源通親』(吉川弘文館、一九九二年)参照。

(41) 田淵句美子氏も、『女房文学史論』(岩波書店、二〇一九年)第四部第一章(初出は二〇〇四年)において、この贈答歌を歌集に残したのは「歌集成立時の権力者西園寺公経、及びこの集の献呈先の定家が、公経と繋がりが深いことを意識したのかもしれない」と述べる。

(42) 藤原成子については、櫻井陽子「藤原成親の妻子たち」『駒沢国文』四七号、二〇一〇年二月)が新見を盛り込んでいる。成子の生没年は未詳であるが、櫻井氏は応保元年(一一六二)年くらいの生まれかと推定する。また『大日本史料 第五篇ノ二十七』所引の『門葉記』により、宝治二年(一二四八)十月二十一日の生存は確認される、と日下氏は指摘する。

(43) 中村文『後白河院時代歌人伝の研究』(笠間書院、二〇〇五年)第四章(初出一九八五年)に伝記研究がある。

(44) 曾我部愛「後高倉王家の政治的位置―後堀河親政期における北白河院の動向を中心に―」(『ヒストリア』二二七号、二〇〇九年十月)は、『民経記』寛喜三年一月二十七日条、同年二月十七日条などを例示し、親長は北白河院年預となるものの「故実に疎く儀式に際して幾度となく失態を繰り返し周囲の失笑をかつている」と指摘する。日下氏も同様に『明月記』における親長への批判的な記事を取り上げている。

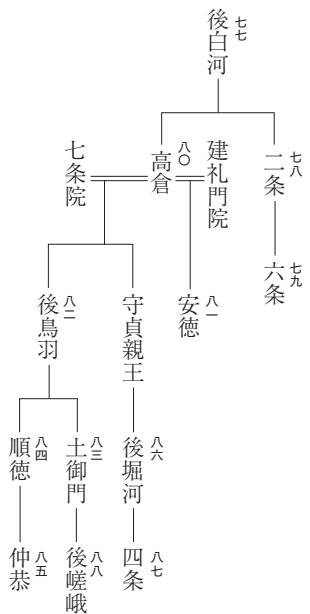
(45) 親長の生没年は未詳と記載されるが、『民経記』の安貞元年（一二二七）十一月十五日条（裏書）に「親長朝臣齡五十六」とあり、承安二年（一一七二）生であることがわかる。本文の引用は『大日本古記録 民経記』による。

(46) 資盛は元暦二年（一一八五）二十五歳、通宗は建久九年（一一九八）三十一歳で亡くなる。資盛は右権中将、藏人頭、一方の通宗は左中将、藏人頭、参議を歴任した。

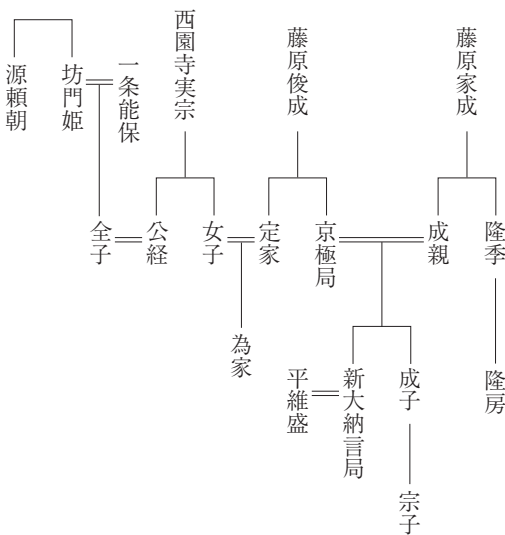
(47) 『冷泉家時雨亭叢書 明月記』定家自筆本影印による。割注をへで示し、読点・返り点を私に付した。

(48) 遠田晤良「建礼門院右京大夫の召名に関する考察」〔『苦小牧工業高等専門学校紀要』八号、一九七三年三月〕、同「建礼門院右京大夫の再出仕について」〔『野田教授退官記念 日本文学新見―研究と資料―』（笠間書院、一九七六年）。注（36）久保田著書。兼築信行「歌人たちと社会―七条院とその周辺―」（『和歌を歴史から読む』（笠間書院、二〇〇二年）。注（41）田渕著書。

【天皇家系図】



【成子・定家周辺の人物系図】



(いじま あきこ・武庫川女子大学)